保育の体験と思索
――子どもの世界の探究――（八）

津守　真

三歳児の作るもの

はさみで切って鉛筆やクレヨンで曲線をかいた紙片、細長い紙をセロテープで貼ってひらひらさせたもの、折紙に何かをかいて最後に何枚も貼り合わせたもの、などなど、三歳児の作るものには、一見無雑作でたいした意味もないかのように見えるものが多い。私の手もとには、いろいろの機会に子どもからもらった、そのような作品が数多くある。短いふれあいの間にもらった紙切れを、ずっと後になって手にとってみると、その子どもの肌のぬくもりが伝わってきて、その子に再び対面しているような気がする。写真1はその一例である。その子どもは、いまはもっと成長していて、こんな幼稚なものはもう作っていないだろう。けれどもこれを作った時の心は、いまもどこかにはたらいていて、この子どもの現在の一部を作っているのではないかと思う。こういう一見なんでもない作品は、幼稚園の三歳児のクラスの中にも、数多く見られる。それはむしろ先生の見ていないところで作られていることが多いかもしれない。机の下、床の上などに落ちていて、片づけるときに掃き集められ、屑籠に捨てられてしまうかもしれないようなものである。しかし、実は、一番子どもらしいものであり、それを作ることによって、子ども自身も満足を得ているような、実質的な作品である。

それが作られるときの傍にいても、子どもが何を作ろうとしているのか、私どもには分かりかねることが多い。しかし、じっくりつき合っていると、おとなには意味が分からないものであっても、子どもが自分で思うように作り遂げるところに、その子ども

にとって欠かせない成長の一歩があることがわかる。

ここで私は、家庭の子どもYが、三歳児の年齢の時に作ったものを材料として、この段階のいわば初歩的な作品について考えてみようと思う。そのほんの一端を垣間みるにすぎないのであるが。

いくらか分かりかけてくるヒント

三歳児の作るものには、実際、意味のよく分からないものが多い。たとえば、Y(1)（6月9日3：7—5）は、細長い紙の先に、丸く切った紙をセロテープで貼り、赤いクレヨンでうずまきにかいたものである。Y(2)（6月10日）は、画用紙を折りたたんでセロテープでとめたものである。表面や内部に何かかいていることもあり、かいてないこともある。Y(3)（6月10日）は、画用紙を二回折って、はさみで刻みをいくつもいれ、開くと三列に刻みの入った模様ができる。それに細長い紙をセロテープで貼りつけたものである。いずれも、子どもは何かを作っていると思われるが、何であるのかは明瞭でない。何かの物ではなくて、子どものとらえたある感じを、ここに作ろうとしていると考えた方がよいだろう。

Y(4)（6月14日）は、紙のヘリの直線部を利用して切ったものの上に、黄色のクレヨンで線をかいたもの、Y(5)（6月19日）

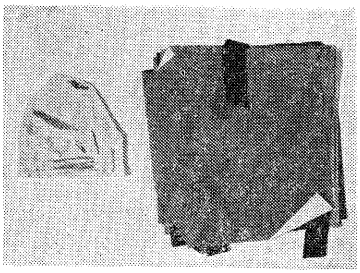
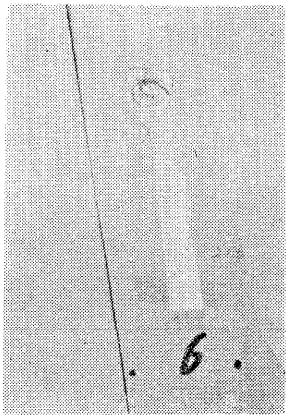
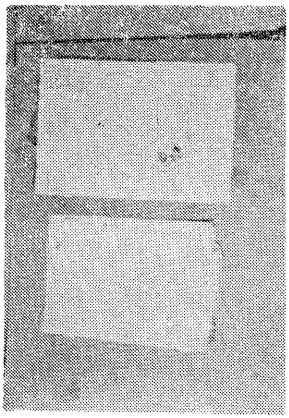


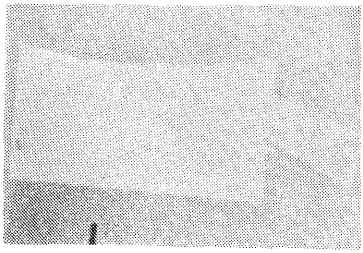
写真1



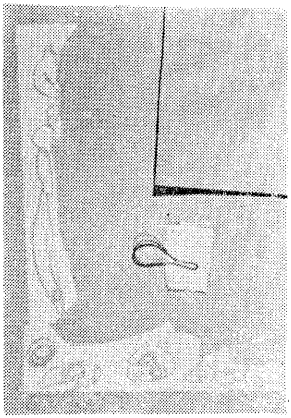
Y(1)



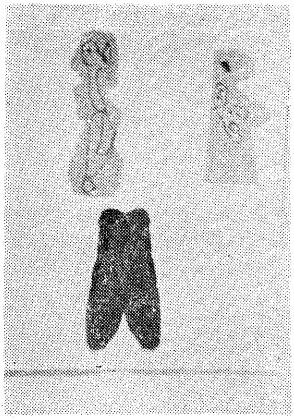
Y(2)



Y(3)



Y(4)



Y(5)

も、紙のヘリを利用している。紙の縁や角を利用して切ったものが他にもいくつもあるが、Y(6)（7月15日）の同様のものは、「カラスがないているところ」という言葉を伴っている。私は子どもが作ったものに対して、何を作ったのかを問うことはめったにしない。こちらから質問すれば、子どもは何かおとなの喜びそうなことを答えることになって、それはかならずしも子どもの思っているものと一致しないにもかかわらず、おとなの方でそれと思いこみがちになると思うからである。この場合に「カラスがないているところ」と言ったのは、この子どもが「カラス」によって感じるものと、ここに作られたものとの間に共通なものがあるからと考えられる。なきながら空をとぶカラス、屋根や木の上で何かを口ばしでつつくカラス、突然空から舞いおりてきて地面をつつくカラスは、いずれも子どもにとって身近なものである。そのカラスを、子どもは紙の縁の直線や角に結びつけているのは、カラスの口ばしや動きの直線性や角に印象づけられていると考えてよいであろう。

十年後に、同じ子どもに私はたずねてみた。

「カラスって好き？」

Y「こわいけど好き」

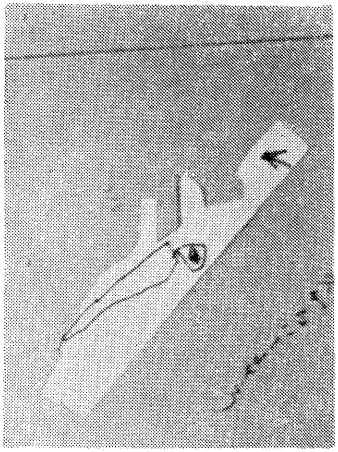
「何がこわいの？」

Y「急にとびかかってくるみたいでこわい」

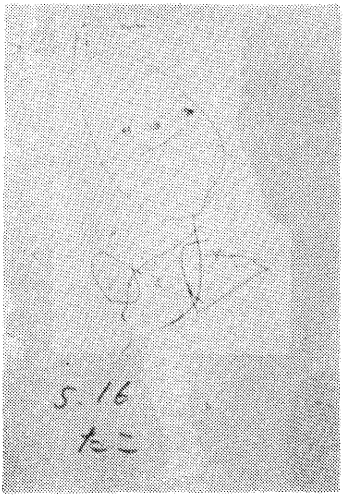
Y「カラスって、シューッてとんでくる」

Yのとらえているカラスは直線的であることがわかる。

Y(7)（5月16日）は、画用紙に人物を描いてから、細長く紙を切り、セロテープで貼りつけたものである。Yはこれを「たこ」という。凧のしっぽと考えれば、この細長い紙片を貼りつけたことの説明は一応つくのであるが、Yは何故凧のしっぽをつけたのだろうか。三歳のYにとっては、道路の上をひきずって歩くときに動きまわる凧のしっぽは、空高くとぶ凧よりももっと身近なものだからではないだろうか。自分の足もとでひらひら動きまわるものが、この細長い紙片ではないだろうか。



Y(6) カラスがないているところ



Y(7) たこ

Y(8)（5月19日）は、「うさぎ」と名付けられたものである。Yはこれにリボンをセロテープで貼りつけ、その端を持って歩く。引っ張って歩きまわるためのひもを、自分でつけたわけである。引っ張って歩くと、足もとでひらひら動く。

Y(9)（5月26日）は、「りんごだからね、ここきらなきゃ」と言って、りんごのわきを斜めに切った。これはりんごを食べるときに、皮をむく動作と思われる。

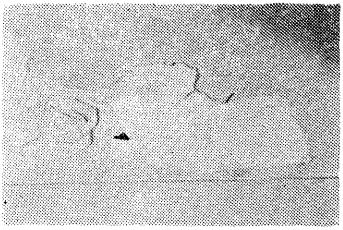
Y(10)（6月11日）は、「おいも　おなべにいれてある」という。こういうのを見ると、まるいかこみの中の小さなまるは、おいも

をかいたのだということがわかる。そして、両端の小さなかこみは、なべの把手である。こうして子どもが自分からかいたものの説明をする場合は、かならずしも多くなく、普通は何かおとなには理解できないものをかいたという結果になる。この例のように、自発的な言葉がつくと、なべの中でごろごろ動いているおいもが、子どもにとって印象的であったことがわかる。

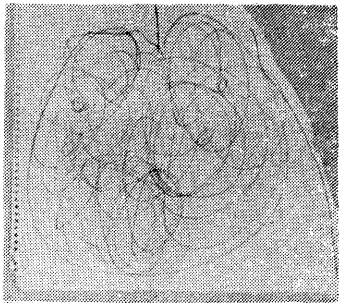
Y(11)（6月6日）は、うさぎの体の部分に、クレヨンで渦巻形に赤い曲線を描いたもので、「ようふくぬったの」と言う。渦巻形の動きは、洋服を縫う動作と見てよいであろう。Yはこの後も、縫うとか編むとかの手の動作にとくに興味を持っている。こう見ると理解できる絵が何枚も出てくる。たとえば、Y(12)（6月15日）は、Yは何も言っていないが、洋服を縫って着せてある人間と見ることに無理はないであろう。

Y(13)（6月6日）は、はさみで刻みが平行にいくつもいれてある。「あたまとかすもの」という。Y(14)（6月19日）は「ナイフ」と名付けられる。いずれも、偶然にできた形の類似性から名づけられたものである。

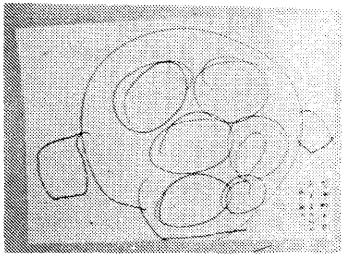
これらの例からも、一見何でもないような紙片が、子どもにとっては、それなりの意味を持ってかいたり作ったりしたものであることが分かる。



Y(8) うさぎ



Y(9) リンゴだからね，ここきらなきゃ

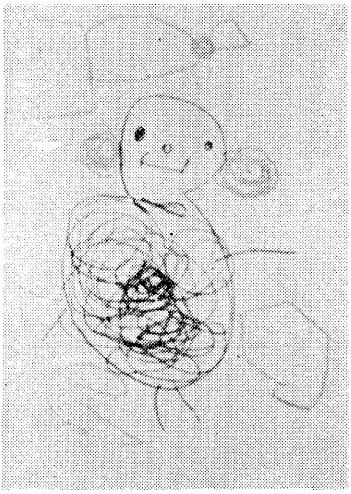


Y(10) おいも　おなべにいれてある

親しみをこめてかく

ただのなぐりがきに見えるものでも、子どもは、親しみをこめてかいている人物画は数多くある。人物画の成立や変化は、非常に面白いテーマであるが、それだけで厖大な課題であり、ここではふれない。人物を描くときに、子どもはただ描くことの興味からだけかくのではなく、人物に対する親しみの感情が背後にある場合が多く、この初期の段階によくあらわれる。

Y(11) ようふくぬったの



Y(12)

Y(15)（4月12日）は、「チャーチャン」（母親のこと）と名付けられる。最初かいているときに、「トート（父親）の髪の毛」と言って頭の上をかいていたが、それから顔をかいたら、かわいくなって、「チャーチャン」にした。それからリボンをつけ、スカートを鉛筆でかいた。このころ人をかくと「チャーチャン」と言って、人物画が親しみのある母親と結びついていることが多い。Y(16)（4月12日）は、「おとうちゃまがかえってくるところ」と言って描かれたもので、自動車である。その紙の裏に描かれたのがY(17)で、「あめ」と言う。短い線で描かれた雨の中を、父親が歩いてくるところである。これらは小さな作品であるけれども、そのときの子どもの世界の中で大きな意味を持つ人物を親しみをこ

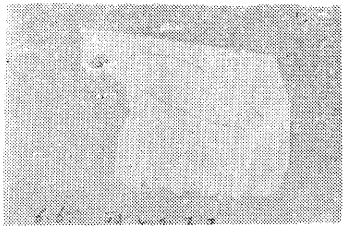
めてかいているように思われる。

Y(18)（4月29日）は、五枚の紙にいろいろ描いて後、ホチキスでとめたものである。その内側の一枚は母親である。何枚も重ねて貼り合わせ、内部が見えないようにしてしまうものがYの作品の中にはいくつもある。どうして一生けんめいかいたものを、のりづけして見えなくしてしまうのか。それは中の方にうずめて、自分だけの内密の空間を作っているように思われる。Y(19)（3月7日）は、十枚の折り紙を貼り合わせた一例である。幼児期をすぎて十年後になっても、Yは内部が幾重にも作られた箱を一番好むし、また、自分の部屋の中を他の人に立ちいられることをいやがる。Yにとっては、内密の空間は、自分自身の親しみのこめられた空間である。母親を描いたとき、何枚も紙を重ねてその中に母親をいれこむのである。

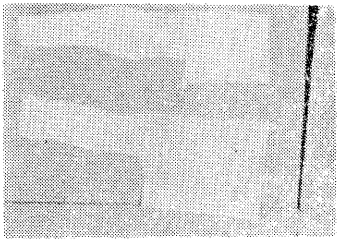
Y(20)（4月12日）は、「ちゃーちゃんのへんちょこなかお」である。かいているうちに、自分でもへんちょこな顔にみえてきた。そしてケラケラと笑う。ユーモアのある作品である。

作りながら自分自身の世界を発見すること

作ることやかくことも、他の遊びと同様、最初は、何かを作り、何かをかこうとしてはじめることが大部分である。最初からこういうものを作ろうと明瞭な意図を持ってはじめることは少な



Y(13) あたまとかすもの



Y(14) ナイフ

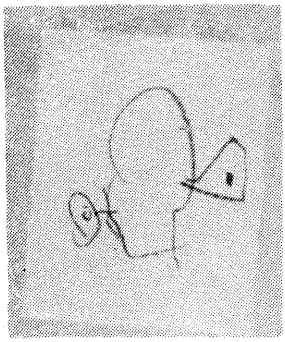
Y(15) チャーチャン

いのがこの時期である。そして、作っているうちに、そこから新しいことを思いついて、思いがけないものができてゆく。

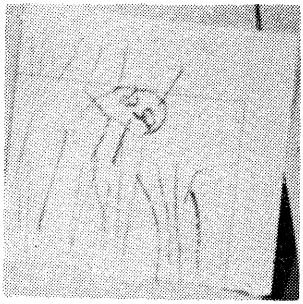
6月4日

夕食後、Yは大きい子どもが折紙を折ってはさみをいれ、「こういうの七夕さまにつけるんだよ」と言っているのを見ていた。

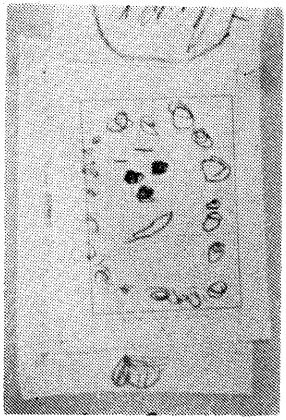
Yも折紙を出してきて、はさみをいれていたが、セロテープを持ってきて、折紙の一面を巻いて帽子のようにし、「ぼうし」と言っていた。(最初は大きい子どもが作るのを見るところからはじまっているが、じきに、全く自分のやり方で進む)それから、黄色いセロファンで円い面をはり、人形にかぶせてみていたが、それでは不満足らしく、白いセロファンを、黄色いセロファンの上に貼りつけた。セロファンとセロファンとを貼るので、思わぬところにベタベタついてしまう。何回も試みた後にようやく成功する。次に、セロファンと折紙の間のすきまのあいたところに指をつっこんでいたが、台所にきてひき出しをあけ、ストローをさがすが見つからない。私はストローをさがして出してやると、そのストローを折紙とセロファンのすきまにいれてみる。ストローの端にセロテープをつけ、それをすきまに差しこんで、セロテープで向う側にとまるように試みる。このセロテープも思わぬところにベタベタつくので、何回も失敗しながらようやくうまくさしこみ、ストローが安定する。そしてYは「アイロンするもの」と言



Y(16) おとうちゃまが
かえってくるところ



Y(17) あめ



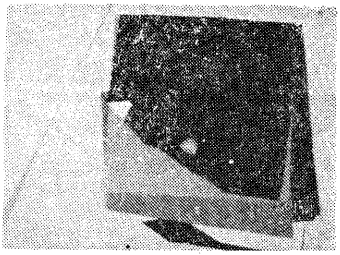
Y(18)

って、それを持ち上げる。大きい子どもが、「ああ、アイロンのとき、シューッとするものね」と言って感心する。アイロンのときに使う霧吹きである。

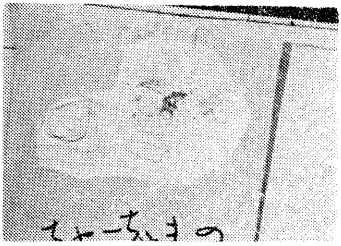
最初は、折紙にはさみをいれるところからはじまり、帽子になり、霧吹きになるのだが、かならずしも明瞭に意図が変化して展開するのではなく、途中でセロファンを貼り合わせるところ、ストローを安定させるところに大きなエネルギーが注がれる。はじめできた帽子では満足せず、アイロンの霧吹きができ上がってはじめて満足する。何かいろいろの要素をふくんだ大きな時間の経過である。

7月17日

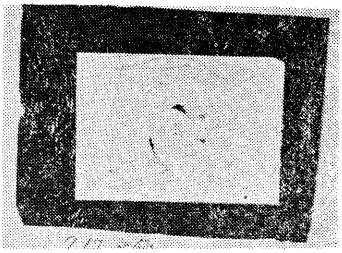
Yは画用紙に曲線と円をかき、その中央をはさみで切りぬいて穴をあけ、その大きさの筒を画用紙で作り、穴にはめこむ。その画用紙を赤いセロファン紙の上にセロテープで貼ろうとする。同じような場所にセロテープを密集して貼り、貼らない部分はそのままあいてしまう。そのうちに、こっちは長いのを貼ろうと言って、セロテープを長く切って貼る。これを満足してみている。Y(21)参照。画用紙の中央に中心をつくるのに穴をあけ高く盛り上げて強調し、さらに画用紙の下に赤いセロファンをつけて、底辺のひろがりを作った。こうして高く突出した中心から底辺へと、三層のひろがりを持った作品である。この何かわけのわからぬもの



Y(19)



Y(20) ちゃーちゃんのへんちょこなかお



Y(21)

は、何か特定の形を持った物を作ろうとしたのではなく、中心を持ちながら、その底辺は奥深くへとひろがるこの子どもの世界把握のしかたを表現しようとしたものではないだろうか。この立体的なひろがりをつくることによって、この子どもは満足した。

これらの例にみるように、子ども自身が何かを作ったという実感を持ち、子どもの姿があらわれるような作品ができる過程には、最初は茫漠としたイメージが生まれ、それが次第に凝縮されて形をなしてゆく時間の経過が見られる。最初、子どもは何かを作ろうとするが、自分でも、何を作りたいのか分からない。いろいろ折ったり切ったりしているうちに、自分の中に、作りたいと思うもののイメージが醸されてくる。だから、子どもが自分から作りはじめることがたいせつになってくる。他人から課題を与えられて作るのでは、その課題の要求に従うことが目標となって、自分自身の中にイメージが醸成されてこない。何かがはじまるまでのこういうときの時間は貴重なものである。いろいろと試みながら、ゆったりと過ごすことのできる時間は、時間そのものが何かを生みだす力を持っているかのようである。人間にとって、時間とは、針で刻まれる時計の時間の認識のみでなく、大きな幅を持って押し出され、ふつふつと湧く泡のように、生命あるものがその中にうごめき、そして何かを生み出してゆくような、生きられる時間の認識が重要ではないだろうか。子どもにとって、製作や遊び、課題など、おとなが時間の区切りをつけてゆくのではなく、子ども自身が生きることのできるような時間を与えることがたいせつなのだと思う。

茫漠としたイメージが生まれてくると、子どもはそれに従って作りはじめる。おとなの目には、何かが出来上がったように見えても、子どもは自分のイメージに合うまで、さらに作りかえ、試みる。このとき、子どもは必要な材料をさがしたり、どうやったら思うものができるかわからないで、おとなの助けを必要とすることがしばしばである。おとなの方からいうならば、子どもの中にあるイメージをその場で直ちに知ることができないから、意味がよく分からずに、子どもの要求にこたえることになる。子どもが必要としているから必要なのであろうという、子どもへの信頼を手がかりにして行動することになる。そして子どもが満足するものが出来上がったときに、一緒に喜ぶと、子どもの世界は安定感とひろがりを持つことになるだろう。こうして作ったものは、おとなの目からは、形のととのわないものが多いが、よく見ると、このような作品には、その子どもの世界を見出すことができるのである。

（つづく）